

68

イブン・スィーナー（アヴィセンナ） 『医学典範』の東西における注釈伝統

矢口 直英

日本学術振興会特別研究員

イスラーム世界において、医学の集大成と言われるイブン・スィーナー（Ibn Sīnā, 1037年没）以後の医学者たちは彼の『医学典範』（al-Qānūn fī al-tibb）に対する注釈書や要約書を執筆することに終始し、医学研究は衰退した、と古くは言われていた。このような「暗黒時代」評は否定されてきたが、数多くある『医学典範』の注釈の実態は未だ明らかになっていない。『医学典範』は12世紀以降、イスラーム世界で多数の注釈や要約の対象となり、またその注釈や要約がさらなる注釈や要約を産んだため、文献目録にはこれらの関連書物が数多く記録されている。一方ヨーロッパでは、『医学典範』は12世紀後半にクレモナのゲラルド（Gerardus Cremonensis）によってラテン語訳された。こうして伝わったアヴィセンナ（Avicenna）のCanon medicinaeは、その後大学医学部の教科書として採用され、ラテン語でも注釈書が書かれるほどに注目を集めた。このように洋の東西を問わず、非常に多くの注釈文献が伝わっているものの、それらを題材とした研究は未だに乏しく、特にアラビア語の注釈書はほぼ全てが写本の状態であるため、全体像すら把握されていないに等しい。本発表では13から14世紀に書かれたアラビア語およびラテン語の注釈書における冒頭の記述を比較し、それぞれの特徴を明らかにするものである。

イル・ハーン朝下で活躍した天文学者としても名高いクトゥブッディーン・シーラーズィー（Qutb al-Dīn al-Shīrāzī, 1311年没）は、当時のイランにおける『医学典範』教育に不満を抱き、自ら注釈を著すべく諸学を学んだ。彼が執筆したアラビア語の注釈書『医学典範総論注釈』（Sharḥ kullīyāt al-Qānūn）は、『医学典範』第1巻（＝総論）のみを対象としているが、その中では長大で緻密な議論が展開される。現存する写本の数からこの注釈書が広く普及したことが分かる。一方、ラテン語圏の比較対象としては、近い時代のジェンティーレ・ダ・フォルニーニョ（Gentile da Foligno, 1348年没）による注釈書を選ぶ。これは、イタリアの大学医学部で教鞭を執った人物により、教室での講義に向けて作成されたものである。彼の注釈書は『医学典範』全5巻にわたる大部なものでありながら人気を集め、印刷されて広く利用されたもので、ラテン語注釈書の代表例として申し分ないだろう。

『医学典範』冒頭に当たる第1巻第1部第1教則第1章は、哲学的学問論に沿って医学の定義を扱っている。イブン・スィーナーは医学を「現存する健康を維持し失われたそれを取り戻すために、人間の身体の諸状態が、健康になり健康から外れるものという側面で、そこから知られる学（‘ilm/scientia）」として定義する。この定義について、シーラーズィーは彼以前の『医学典範』注釈者たちが提示してきた様々な議論を引用して、それらを吟味しながら別個に承認あるいは批判をしている。その上で彼は、イブン・スィーナーが医学を然るべく定義しているという結論に至る。それに対して、ジェンティーレの注釈は過去の学者たちの言説を引用しているものの、同書への注釈書ではなく、『医学典範』と同一の主題を語る書物（医学書や哲学書）が中心である。彼もまたイブン・スィーナーを擁護しているが、シーラーズィーが『医学典範』の直接の批判者たちを論敵としているのに対して、ジェンティーレは単に他の学者たちの見解を検討している。ここからは、イスラーム世界では『医学典範』がいわば医学の枠組みを形作り、その注釈が議論の場としての役割を担ったが、ヨーロッパでは『医学典範』が大学の教科書として利用され、医学の入門として位置づけられたという事情が読み取れるのではないだろうか。